

宮澤賢治論

—— 恋愛・結婚観の変遷と童話作品への反映（下） ——

表 千 尋

はじめに

一 物語の構図と作品の成立した時代背景

童話「シグナルとシグナレス」は大正十二年（一九二三年）五月十一日から二十三日まで岩手毎日新聞に掲載された、宮澤賢治の生前発表童話の一つである。花巻駅に乗り入れる国鉄東北本線と岩手軽便鉄道それぞれの腕木式信号機をモデルとした、シグナルとシグナレスの切ない恋の物語である。

宮澤賢治の童話作品のなかで「恋愛」をモチーフとして取り扱ったものは少ない。とりわけ、「結婚」というテーマに言及している童話はこの「シグナルとシグナレス」だけであろう。本論は作者宮澤賢治の「結婚」観がどのように作品に反映されたか「シグナレスとシグナレス」を中心に、童話作品や詩・短歌作品を検証し考察するものである。

「シグナルとシグナレス」の物語はわかりやすく二項対立の構図をとっている。電気技術・電気文化の全国的な普及という時代背景の中であらわになった問題——近代化し文明的な都市意識と旧態然として遅れている地方の現実の落差・分断の問題が、国鉄の信号機シグナルと地方鉄道の信号機シグナレスという両者の対立と、二人の恋を阻む様々な要因として表現されているのだ。

国鉄東北本線付きの最新式信号機であるシグナルは、「新しいもの」の象徴である。彼は金で出来ており最新式の電燈の眼鏡を二つも持っている。世話役の電信柱も付いている若様で、インテリジェンスを気取る。またシグナルの眷族に「叔父」という表現が使われるなど男性性を代表している。新しく、近代的で、都市に連なる身分もあれば富もある者——陽の立場を象徴する。

一方の岩手軽便鉄道付きの旧式の小さな信号機シグナレスはその名が指し示す通り女性性の代表であり、シグナルとは対極をなす「古い」存在である。東の空を見つめながら彼女が気にするのは「伯母」

という女性の眷族で、自分が木製でランプの眼鏡を一つ持つだけであることから恐縮している。彼女は可憐ではあるが、旧く、前時代的で、土着のみすばらしく弱い者——陰の立場を象徴するものとして書かれている。

二人は対極をなしながら、それぞれ信号機としての務めに動しんでいたわけだが、シグナルからシグナレスへのアプローチをきっかけに両者が接近する。彼の恋を阻むのは二人の身分の差（と、それから生じるコンプレックス）と目付役の電信柱を筆頭とした周囲の猛反対であった。

次に、作品の成立背景を考察するために当時の日本の近代化事情を参照してみる。そもそも、賢治が生まれ育った明治・大正時代にかけて、日本は近代化まっさかりであり国際性と愛国心、物質文明と精神文化といった新旧の概念が浮き彫りとなり対立した時代だった。特に欧米から飛び火した科学的事実の探究と宗教がさしのべる救済の対立は多くの若者を悩ませ、賢治も理性と信仰の狭間から彼独自の答えを見つけたそうとしていた。

明治三十年代後期、水力発電の増加によって終夜の電気供給が可能になった。水力発電の増加により大都市（東京）を中心に、それまでのガス燈にかわってタングステン電球の電燈が急速に普及する時代を反映し電燈だけでなく、電線、電車、シグナル、電話といったワードが多くの作家の文学作品にも登場するようになる。

また岩手県の電気事情を参照すると、東京に後れること十余年ほど、大正はじめから大正十年代にかけて発電所数が増加し電気インフラが普及した。これは賢治の文学活動の時代に重なる。大正四

年には東北最初の電気鉄道も開業した。そのころすでに鉄道は大都市・東京へつながる象徴として地方の人々に受け入れられていたが、さらに電気事業は近代文明の象徴として受け入れられ、賢治も例外ではなかった。電力の大量供給は、精神主義者だった賢治の本質を根底からおびやかす、革命的歴史的現象であった。また大正十年（一九二一年）に父・政次郎が花巻電気会社の常務に就任したこともあり、「電気」は賢治にとつてますます身近に、重要な問題として認識されるようになった。賢治の作品に電燈や電信柱の語が意識的に書かれはじめたのは大正九、十年頃のことである。電気の灯が点る地上と星々が光りさざめく夜空の風景は賢治独特の幻想的な夜の表現のルーツともなった。

二 分断された「都市」と「地方」の問題提起

賢治が文筆活動をはじめめる頃にはすでに、先行して近代化を推し進め発展する東京と、遅ればせながらやと後続する地方という構図がすっかり出来上がっていたのだ。東京へは鉄道網や電信で繋がっていることもあり、東京は決して「遙か彼方」の大都会ではなかった、だがかえってそれは人々に羨望とコンプレックスを抱かせたのかもしれない。賢治の心中はふるさとへの愛執と近代化のなかなに進まない郷土の現実への憂慮で渦巻いていただろう。

分断された東京と地方の問題は作中に書かれた二種類のコミュニケーション方法にも象徴されている。次はシグナルの失言から電信柱が二人の結婚に猛反対する直前までのシーンである。シグナルが

らシグナレスへのアプローチは西風三頼みで相手の返事もうまく聞こえないというアナログなやり方であるのに、対称的に電信柱たちは電報という近代的なネットワークでめまぐるしく会話しているのである。

・シグナルは、風が強くて電信柱に聞こえないのいいことにして、シグナレスに話しかけました。「僕の話聞こえますか、僕はシグナレスさんと結婚して幸福になって、それからお前(電信柱)にチョークのお嫁さんをくれてやるよ」と言ったのでした。その声は風下のシグナレスにはすぐ聞こえましたので、シグナレスはこわいながら思わず笑ってしまいました。

・本線シグナルつきの電信柱の怒りよと言ったらありません。すぐひどく手をまわして、すなわち「ペン東京まで手をまわして風下にいる軽便鉄道の電信柱に、シグナルとシグナレスの対話がいったいなんだったかたずねてやりました。

・シグナレスよりも少し風下にすてきに耳のいい長い長い電信柱がいて、知らん顔をして空の方を見ながらさつきからの話をみんな聞いていたのです。そこでさつき、それを東京を経て本線シグナルつきの電信柱に返事をしてやりました。

電信柱どうしの電報では、わざわざ「いっぺん東京まで手をまわ

して」もすぐに返事をもらうことができる。この回りくどさは賢治のユーモアでもあるが、電報は発明から随分経った当時であっても先端技術で高価なサービスであった。電信によるコミュニケーションは近代化・都会らしさのシンボルであり、そのものずばり「東京」につながっているのである。

また賢治作品ではしばしば「電信柱」は一つの意識を共有する全ての存在、あるいは連帯感の象徴として書かれていること^四も一考に入れておくべきだろう。電気エネルギーや電気信号を共有する電線は物理的なつながりであり、命令系統のつながりであり、精神のつながりなのである。

一方、電線によるつながりを持たないシグナルとシグナレスの会話は、風に左右される運任せのコミュニケーションだった。シグナルは西風に頼んでシグナレスへ告白したが、シグナレスからの返事は返らなかった。返事をもらえなかったシグナルは自殺を考えるほど絶望してしまう。まわりの電信柱たちが寝静まり、密やかに会話できる静かな夜にやつと誤解はとけるが、ようやく相思相愛が発覚した後もときにジェスチャーを交えながら、二人は懸命にコミュニケーションを取ろうとする。

「シグナルとシグナレス」の発表の背景には、近代化の流れに置き去りにされた地方を、生活水準の面でも精神面でも大都市圏に匹敵させたいという願いもあったのだろう。

実際、一九二〇年代頃から岩手軽便鉄道の国有化を目指す運動^五があった。現金石線の仙人峠―大橋間を結ぶ鉄道を建設する動きが大正十年頃からはじまり、岩手軽便鉄道会社は国鉄に依頼して建設

ルートの試算を行っている。時の内閣総理大臣は岩手県出身の原敬だったが、同じ岩手県の山田線の建設には積極的に取り組んだのに対して、政治的な理由から仙人峠の鉄道に関しては冷淡な態度だった。「シグナルとシグナレス」の発表ののち、大正十四年（一九二五年）には、仙人峠の国鉄による建設の請願だけではなく、岩手軽便鉄道全体の国有化の運動も始められた。

岩手軽便鉄道の国有化——シグナルとシグナレスの結婚は、新しきものと旧きものの結婚であり、分断されたものを懸命につなぐとする二人のやり取りは、二極化した東京と地方を結び同一のレベルへ引き上げるためのプロパガンダの側面も持つて岩手毎日新聞に掲載され、衆目に触れたのである。

三 賢治の自伝としての童話

「シグナルとシグナレス」の制作と発表の背景には東京と地方の分断の問題の解消というプロパガンダ的な面が大いにあったことはこれまでに述べたとおりだが、反面、シグナルとシグナレスのロマンチックな婚約の物語は賢治自身の個人的な結婚観を、あるいは恋の淡い感傷を昇華した自伝的な側面もあつたのではないだろうか。

賢治は舞台芸術にも関心があり、自身でも「飢餓陣営」のような脚本を手がけた。キャラクターたちのユニークな歌——独特のオノマトペを含んだ音楽的なフレーズは多くの童話作品に見られるが、「シグナルとシグナレス」はその中でも演劇の要素を多分にちりばめられている。ナレーションの地の文が「諸君」と観客に呼びかけていることからわかるとおり、「シグナルとシグナレス」は大いに

観客（読み手）を意識した構成になっている。作品が新聞に掲載され人々の目に触れるということへの賢治の発奮と自信の表れ、読み手を引きつけたという思いから生まれた構成とも考えられる。そういう諸々を考慮した上で、やはりこの物語は過分にロマンチックだと言えないだろうか。

田舎娘が身分もありインテリジェンスも持ち合わせた男性に見初められるというストーリー、「ロミオとジュリエット」の物語のごとく二人を悲劇的に引き裂く障害の数々といった劇的な構成。明るく輝く月は舞台装置、機関車や電信柱が歌う歌はまるでミュージカルである。シグナルが発した「愛してください」という直球な告白の表現は当時としては斬新であり、西洋から伝えられた劇脚本や文学作品の中にしかまだ無いものであつた。まるでロマンス劇のような体で物語が繰り広げられているのである。

賢治は自身では叶わなかった「恋」と「結婚」の夢を昇華させ、花巻の駅を舞台にシグナルとシグナレスたちに演じさせたのではないだろうか。

生涯を未婚で貫いた賢治は、その一方で埋め合わせのように友人の結婚の世話には熱心だったという。賢治自身は家にとらわれぬ純粋な自由恋愛・結婚に賛成していた。友人藤原嘉藤治の話によると、実際昭和三年三月、賢治は嘉藤治のためにわざわざ青森まで出向いて花嫁（女給の女性）の親の許しを得に行き、婚礼の準備を整えるなど仲人の役割を懸命に果たしたという。

「シグナルとシグナレス」にも二人の結婚を取りまとめてやろう

とする倉庫の屋根というキャラクターが登場する。「ロミオとジュリエット」で言うならば修道僧ロレンスの立ち位置であらうか。ロマンス劇の引立て役である彼はシグナルとシグナレスの結婚に唯一賛成してくれる者であった。倉庫の屋根の立ち位置はそのまま賢治の自由結婚に対するスタンスを表しているだろう。

倉庫の屋根は「都市」と「地方」を代表するシグナルとシグナレスを繋いでやろうとした。また倉庫の屋根は同時に「都市文明」と「自然」を繋げる役目も負う存在だったと言えよう。倉庫の屋根は自らを「風ひきの脈の甥」で「めくらとんびの後見人」だと名乗り、人工物でありながら自然界との繋がりをにおわせているのだ。彼が持つ役目——シグナルとシグナレスを天上界と交信させ夜空へ導く事——もシャーマン的な存在であることを暗示している。自然を「恋人」とし、自然に連なる者となろうとした賢治の姿に重なるものを感じさせる。

「宮澤賢治論 恋愛・結婚観の変遷と童話作品への反映(上)」では賢治の女性観・恋愛観・結婚観がどのように変遷してきたかを検証してきた。そのまとめを次に整理する。

- 「儂げなヒロイン像」のルーツは特別視された初恋の非成就の経験と妹トシの姿にあった。
- 自身の結核の発病から、肉体的なものから精神的なものへと大きく結婚観・恋愛観が変化した。

- 個人的な恋愛の挫折から、個への愛でなく「みんなのほんとうの幸福」を願う全体愛の思想へと転換し、さらに賢治自身は自然との同化希求を持つに至った。
- 独身主義・禁欲主義の中で女性観が、想の「儂げなヒロイン像」と避けるべき「生々しき女」に二極化した。

次章ではこれらのことを踏まえたうえで、再び童話「シグナルとシグナレス」を読み解くこととする。

四 落雷による個人的恋愛の挫折の表現

「シグナレスさん、お返事をしてくださいませんか。ああ僕はもうまるで暗闇だ。(略)ああ雷が落ちて来て、一ぺんに僕のからだをくだけ。もうなにもかもみんなおしまいだ。」

「ああ、シグナルさんもあんまりだわ、あたしが言えないでお返事もできないのを、すぐあんなに怒っておしまになるなんて。おお神様、シグナルさんに雷を落とす時、いっしょに私にもお落としてくださいませ」

これはシグナレスから愛の告白の返事をもらえなかったシグナルが絶望して自殺を願うシーンの台詞である。シグナルの誤解に絶望したシグナレスも、ともどもに落雷に遭いたいと願う。

信号機であるため動けないシグナルたちが自殺の方法として自然災害や事故を願うのはわからない話ではないが、なぜ「落雷」を彼

らは願ったのだろうか。それを考察するためにはまず賢治が「雷」をどう捉えていたか、というところからはじめねばなるまい。雷は賢治にとって身近で、かつ大きな意味を持つ現象だった。東北地方では現在も雷を「おらいさま」と呼ぶ雷神信仰が残っている。「シグナルとシグナレス」中にも「お雷(らい)様」の語がある。また賢治が好んで訪れ、多くの作品に書いた種山ヶ原には雷神を祭る碑が数多くあったという。鉱石採集などで賢治はよく登山したが、その折たびたびひどい落雷に遭遇した。

賢治にとって「電気」は自然科学的なエネルギーであり、都市文明の原動力・象徴でもあった。賢治の中で「雷」は、電気エネルギーと同質のもの——自然と都市文明の両方にまたがるものである、という認識に加えて、さらに宗教的・霊的存在としても認識されている。シグナルたちにとって、電気が物理的なエネルギーでありながら「雷」として信仰の対象となり、精神的なエネルギーの根源にもなっているのは賢治独自の「電気」の捉え方が反映されているものである。

さてその自然科学的なエネルギーであり宗教的な力も秘めた「雷」に打たれるとはどういうことになるか。雷は鉄鎚のように激しく「個人的な恋愛」を望む者に落とされる。落雷によって個人的な恋愛に終止符が打たれるのである。

詩「エレキや鳥がばしやばしや翔べば」(昭和二年(一九二七年)五月十四日)に出てくる「避雷針」「熱はさがらず」という表現も、落雷による個人的な恋愛の挫折のテーマに呼応していると考えられる。

エレキや鳥がばしやばしや翔べば
九基に亘る林のなかで
枯れた巨きな一本杉が

もう専門の避雷針とも見られるかたち

……けふもまだ熱はさがらず

Nymph, Nymbus, Nymphaea,……

「シグナルとシグナレス」の物語では結局二人の相思相愛が発覚したので、個人の恋愛の挫折は起きなかった、もし「落雷」があったらどうなったのか。落雷による個人的な恋愛の挫折というテーマは「シグナルとシグナレス」のあとに書かれた童話「ガドルフの百合」にも描かれている。

・間もなく次の電光は、明るくサツサツと閃めいて、そしてガドルフのいとしい花はまっ白にかつと曠つて立ちました。

・「おれの恋は、いまあの百合の花なのだ。いまあの百合の花なのだ。砕けるなよ。」

・そして全くその通り稲光りがまた新らしく落ちて来たときその気の毒ないちばん丈の高い花が、あまりの白い興奮に、たうたう自分を傷つけて、きらきら顫ふしのぶぐさの上に、だまって横はるのを見たのです。

・たゞあの百合は折れたのだ。おれの恋は砕けたのだ。

・雨もやみ電光ばかりが空を亘って、雲の濃淡、空の地形

図をはっきりと示し、又只一本を除いて、嵐に勝ちほこつた百合の群を、まっ白に照らしました。

・(雨さへ晴れたら出て行かう。街道の星あかりの中だ。次の町だつてちぎだらう。けれどもぬれた着物を又引っかけて歩き出すのはずゑぶんいやだ。いやだけれども仕方ない。おれの百合は勝つたのだ。)

雷は靈的な力を帶び、啓示のように、個人の恋愛に挫折した者の意識を変えるのである。雷に打たれて折れた「只一本の百合の花」は、ガドルフの個人的な恋愛の象徴であり、「嵐に勝ちほこつた百合の群」は全体愛の象徴である。セ「おれの恋」と呼んだ百合が、いったんは折れ、砕け、しかしまた最後に「おれの百合は勝つたのだ」と再認識されてガドルフが旅立つていくという経過は、賢治が個人的な恋愛の煩悶から意識を転換し、「みんなのまことの幸福」という全体愛を旨みす新たな一步を踏み出そうとしていることを示している。八

五 童話から削られた「結婚」のテーマ、 童話「シグナルとシグナレス」の成立背景

女性や自身の肉体の欲を敬遠し独身を貫いた賢治は、結核の身の自分を省み、普通に女性と結婚することを罪悪のようにすら考えていた。

「ポラーノの広場」の草稿に、その思いの断片が見て取れるシーンがある。次からは、「ポラーノの広場」の「六、風と草穂」皆が新

しいポラーノの広場を拵えようと話す場面の草稿からの抜き出しである。

・諸君、酒を呑まないことで酒を呑むものより一割余計の力を得る。たばこをのまないことから二割余計の力を得る。まっすぐに進む方向をきめて、頭のなかのあらゆる力を整理することから、乱雑なものにくらべて二割以上の力を得る。

・そうだあの人たちが女のことを考えた時、お互いの喧嘩のことでつかう力をみんなぼくらのほんとうの幸をもつてくることにつかう。

・けれどもこういうやりかたをいままでのほかの人たちに強いることはいけない。あの人たちは、ああいう風に酒を呑まなければ、淋しくて生きていけないようなときに生れたのだ。

賢治の分身であるキューストが発した励ましの言葉は、賢治が歩もうとした厳しい精神主義の道を示している。理性の人たろうとした賢治の決意の言葉だったのだろう。

ポラーノの広場の仲間に入ろうかと言ったキューストは、しかし直後にファゼーロの姉ロザーロとの結婚を勧められて遠慮の台詞を口にする。

・「おい、みんな、キューストさんがぼくらのなかまへはいると。」「ロザーロ姉さんをもらつたらいいや。」だれかが

叫びました。わたくしは思わずぎくつとしてしまいました。

・「いや、わたくしはまだまだ勉強しなければならぬ。この野原へ来てしまつては、わたくしにはそれはいいことではない。いや、わたくしははいらないよ。はいれないよ。なぜなら、もうわたくしは何もかもできるといふ風にはなつていないんだ。わたくしはびんぼうな教師の子どもにうまれて、ずうつと本ばかり読んで育ってきたのだ。諸君のように雨にうたれ風に吹かれ育つてきていない。ぼくは考へはまったくきみらの考へだけれども、からだはそうはいかないんだ。けれどもぼくはぼくできつと仕事をするよ。ぼくはそれを行く。」

なお「ボラーノの広場」では先ほど挙げたシーンは最終的に賢治の手によって削除されている。「農民芸術概論綱要」の結論で賢治は「永久の未完成これ完成である」と書き、自身でそれを実践し晩年まで作品の手入れや改稿を続けた。晩年の推敲にあたつて「結婚」に言及するシーンはことごとく賢治の童話作品から削除されてしまったのである。

「シグナルとシグナレス」は岩手毎日新聞に掲載されたものが全集等で底本となっており、現存する草稿は無く、異文なども発見されていない。もし「シグナルとシグナレス」の原稿が賢治の手元にあったなら、彼らの婚約のシーンや天上界の旅の結末も大きく手入れされていたかもしれない。

また「結婚」のシーンの削除と同様に、「魂の同行者の希求」のテーマについてもその夢は叶わず、「銀河鉄道の夜」のジョバンニとカンパネラのように離別してしまうという結果に収束していく。現存の物語上では、シグナルとシグナレスは結婚は許されないものの、天上の夢の世界で寄り添ひ「二人で」地上へ戻る。類似したテーマの見られる「銀河鉄道の夜」とはこの点で大きく異なっているのである。

「シグナルとシグナレス」の作品の成立時期は未詳だが、「女性」の拒絶と欲から起こる嫉妬心を書き禁欲主義を匂わせる「土神と狐」と、個人的な恋愛の挫折から全体愛へと意識が転換する様を書いた「ガドルフの百合」の間に発表されている事は実に興味深い。「シグナルとシグナレス」は賢治の思想の変化のワンシーンを切りぬいたような、結婚観の変遷の一端を垣間見ることが出来る重要な作品なのである。

六 信号機の「結婚」 ——フラットニック・ラブと「まことの恋」の恋

賢治にとって、諦めの気持は大きかったけれども、「結婚」することはずっと夢として心に残っていたのかもしれない。詩「わたくしどもは」（昭和二年（一九二七年）六月一日）には幻のような「妻」の姿が書かれている。

わたくしどもは

ちやうど一年いっしょに暮しました

その女はやさしく蒼白く

その眼はいつでも何かわたくしのわからない夢を見てゐるやうでした

いっしょになつたその夏のある朝

わたくしは町はづれの橋で

村の娘が持つて来た花があまり美しかったので

二十銭だけ買つてうちに帰りましたら

妻は空いてゐた金魚の壺にさして

店へ並べて居りました

夕方帰つて来ましたら

妻はわたくしの顔を見てふしぎな笑ひやうをしました

た

見ると食卓にはいろいろな菓物や

白い洋皿などまで並べてありますので

どうしたのかとたづねましたら

あの花が今日ひるの間にちやうど二円に売れたといふのです

……その青い夜の風や星、

すだれや魂を送る火や……

そしてその冬

妻は何の苦しみといふのでもなく

萎れるやうに崩れるやうに一日病んで没くなりまし

た

信号機という人工の無機物が主人公に選ばれたのは、肉体のしがらみからはなれたプラトニック・ラブの成就という賢治の夢が彼らに託されたからではないだろうか。

擬人化された信号機であるシグナルたちは腕木の上げ下げという仕事を負い、人工物であるがゆえにそこから動くことがかなわず自殺できずに絶望するシーンもあるが、彼らは病や肉欲といった生物のなしがらみからは自由な存在である。そして二人の「結婚」は精神的な寄り添いを意味していた。賢治は自身には叶わなかった精神的な「結婚」をシグナルとシグナレスに果たしてほしかったのかもしれない。

後年、賢治には「結婚」を考えた女性がいた。生涯で、ただ一度だけ本気で結婚を考えた女性——羅須地人会協会時代に出会った伊藤チエである。彼女とは結局結婚はしなかったものの、ずっと後になって、昭和六年（一九三二年）にこのときのことについて賢治はこう語した。一〇

ずうつと前に話があつてから、どこにも（お嫁に）行かないで待つていたと言われると、心を打たれますよ。（略）
いつ亡びるか解らない私ですし、その女の人にしてからが、
いつ病氣が出るか知れたものではないでしょう。

その会話の相手だった森莊巳池によると、同じエピソードで賢治は精神的な「結婚」についても話したという。二

(賢治は)伊藤さんと結婚するかも知れませんが、一けれどもこの結婚は、世の中の結婚とは一寸ちがつて、一旦からだをこわした私ですから、日常生活をいたわり合う、ほんとうに深い精神的なものが主になるでせう。——というような意味のことをいわれたのでした。

「シグナルとシグナレス」の恋物語において、シグナルの個人的な愛は挫折しなかった。落雷によって碎けることもなかった。二人は両想いとなり、周囲の者に地上での結婚を反対されても、倉庫の屋根の導きによって天上世界で精神的に寄り添うことが出来た。シグナルたちは精神的な「結婚」を果たし、個人の恋愛を成就した。そしてシグナルは「僕たちのねがいがかつたんです」というセリフの後で、「あの僕のブツキリコはどうしたろう。あいつは本当はかあいそうですね」という言葉を発している。二人きりの幸福なシーンで、嫌な相手だった電信柱に「かあいそう」だと思えるのはなぜか。シグナルがシグナレス以外の者を氣にかけたことは詩「小岩井農場」のあの「命題」を髣髴とさせる。

もしも正しいねがひに燃えて
じぶんとひとと万象といつしよに
至上福しにいたらうとする
それがある宗教情操とするならば
そのねがひから碎けまたは疲れ
じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと
完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする

この変態を恋愛といふ

そしてどこまでもその方向では

決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を
むりにもごまかし求め得やうとする

この傾向を性慾といふ

すべてこれら漸移のなかのさまざまな過程に従つて

さまざまな眼に見えまた見えない生物の種類がある

この命題は可逆的にもまた正しく

わたくしにはあんまり恐ろしいことだ

「みんなの幸福を願う宗教風の全体愛が碎けたときに、一人の相手だけ幸福になりたいと願うのが恋愛である」という命題の「逆」をシグナルは証明しているのである。シグナルは賢治が求めた宗教情操、「みんなのまことの幸福」を願う心をも獲得しようとしている。詩「夕陽は青めりかの山裾に」にも同じ命題を思わせる表現がある。ここでは「みんなのまことの幸福」を願う情操に「まことのこの恋」という表現が使われている。

夕陽は青めりかの山裾に
ひろ野はくらめりま夏の雲に
かの町はるか地平に消えて
おもかげはがらにわらひは遠し
ふたりぞたゞのみさちありなんと
おもへば世界はあまりに暗く

かのひとまことにさちありなんと
まさしくねがへばこころはあかし

いざ起てまことのをのこの恋に

もの云ひもの読み苹果を喰める

ひとびとまことのさちならざれば

まことのねがひは充ちしにあらぬ

シグナルとシグナレスが果たしたブラトニックな恋の物語は、結核の発病のために肉体的には諦めざるを得なかった賢治自身の結婚の夢、希求するも悲運的に叶わなかった「魂の同行者」との道行きの夢、そして「みんなのほんとうの幸福」を求道する「まことのをのこの恋」の獲得という理想を託されて書かれた物語だったのである。

余談となるが、賢治が没してから三年ののち、岩手軽便鉄道全国有化が実現したのは昭和十一年（一九三六年）三月二十五日のことであった。平倉停留場が平倉停車場へ昇格し、八月一日には国有化、国鉄釜石線となった。シグナレスはシグナル夫人となったのである。賢治の見果てぬ夢——シグナルとシグナレスの「結婚」の夢はここによりやく果たされたのである。

参考文献・資料一覧

- 『(新) 校本宮澤賢治全集』(筑摩書房、一九七九)
 原子朗・編『宮澤賢治語彙辞典』(東京書房、一九八九、一〇)
 山内修・編『年表作家読本 宮沢賢治』(河出書房、一九八九・九)
 上田哲ほか『図説宮沢賢治』(河出書房新社、一九九六・三)
 森荘巳池『宮沢賢治の肖像』(津軽書房、一九七四・十)
 宮沢清六『兄のトランク』(筑摩書房、一九八七・九)
 佐藤隆房『宮沢賢治』(富山房、一九七五・四)
 『文藝別冊 宮沢賢治修羅と救済』(河出書房、二〇一三・九)
 『宮沢賢治 第十六号』(洋々社、二〇〇一・六)
 渡部芳紀『国文学解釈と鑑賞』別冊 宮沢賢治 名作の旅』(至文堂、一九九二・四)
 国文学編集部・編『宮沢賢治の全童話を読む』(学灯社、二〇〇三・五)
 『春と修羅 第二集 研究』(宮沢賢治学会イーハトーブセンター、思潮社、一九九八・三)
 大塚常樹『宮沢賢治心象の宇宙論(コスモロジー)』(朝文社、一九九三・七)
 関口安義『港の人 児童文化研究叢書〇〇三 賢治童話を読む』(港の人、二〇〇八・一二)
 松田司郎・笹川弘三『宮澤賢治 花の図誌』(平凡社、一九九一・五)
 松田司郎『宮澤賢治 イーハトーヴ図誌』(平凡社、一九九六・六)
 加藤篤『童話「月夜のでんしんばしら」の工学的考察』(『北九州工業高等専門学校研究報告』四四、北九州工業高等専門学校、二〇一

(一)

- 遠藤祐「シグナルとシグナレス」(その一)——信号機たちの物語」
 (『キリスト教文学研究』(二〇)、二〇〇三)
 遠藤祐「シグナルとシグナレス」その二：夜と、そして昼の物語」
 (『學苑』七五一、昭和女子大学、二〇〇三)
 牧野立雄「恋愛と音楽：「シグナルとシグナレス」覚書(特集「宮沢賢治童話の再検討：生誕百十年記念」：「作品の再検討」)(『国文学』七一(九)、至文堂、二〇〇六)
 萬田務「シグナルとシグナレス」考：宮沢賢治作品ノート(二)(たて組)」(『大阪城南女子短期大学研究紀要』一〇、大阪城南女子短期大学、一九七五)
 信時哲郎「結核患者・宮沢賢治」(『上智大学国文学論集』三六、二〇〇三・一)
 池川敬司「宮沢賢治の初恋と短歌…不可解な歌をめぐって」(『國文學』九一、二〇〇七・三)
 中野新治「宮沢賢治における恋愛と宗教…「丁丁丁丁」をめぐって」(『日本文学研究』一四、一九八八・十二)

「火力発電より安価な水力発電への転換は、童話「月夜のでんしんばしら」の中の電気総長の台詞でも言及されている。「はじめて電燈がついたころはみんながよく、電気会社では月に百石ぐらゐの油をつかふだらうがなんて云つたもんだ。はつはつは、どうだ、もつともそれはおれのやうに勢力不滅の法則や熱力学第二則がわかるとあんまりをかくしくもないがね」と彼が言うように、火力発電から水力発電へと移り変わっていったことが分かる。精力不滅の法則とは熱力学第一法則、つまりエネルギー保存の法則を指し、熱力学第二法則はエネルギー

の移動の方向とエネルギーの質に関する法則のことである。つまり水力発電で位置エネルギーを電気エネルギーに変換できるようになったことを反映しているのだ。

大塚常樹『宮沢賢治と電気エネルギー、電氣的イメーじ』（『心象の宇宙論コスモロジー』朝文社、一九九三・七）

偏西風。実際の花巻駅の立地を見ると、軽便鉄道の停車場（シクナレス）の西側に東北本線の停車場（シクナル）があった。

『銀河鉄道の夜』の終盤ではジョバンニがカンパネラに、「僕たち一緒に行こうねえ。」と理想を共有した時に「向こうの河岸に二本の電信ばしらがつ度両方から腕うでを組んだように赤い腕木をつらねて立っていました」とある。「月夜でんしんばしら」では電線が繋がった電信柱たちが軍隊として擬人化され行軍するが「歩くのがつらい」と泣き言を渡らす二本の電信柱に、「はやくあるけ、あるけ。ささまらのうち、どつちかが参つても一万五千人みんな責任があるんだぞ」と他の電信柱が文句を言うシーンがある。

大正十四年（一九二五年）に岩手軽便鉄道の取締役であった瀬川弥右衛門が貴族院議員に選ばれ、仙人峠の連絡鉄道の国鉄による建設を請願するだけではなく、岩手軽便鉄道全体の国有化の運動も始められた。国有化が実現したのは昭和十一年（一九三六年）のことであった。

森庄巳池『宮沢賢治の肖像』（津軽書房、一九七四・十）

大正三年四月以降に制作された「歌稿（A）」に拠ると、岩手病院を退院して恋の悩みをかかえていた時期に、賢治はしきりに「百合根を掘る」という表現を使った。またその少し後には、童話「ガドルフの百合」のモチーフになった連作短歌も読まれている。

一四五 友だちの入学試験近からんわればやみたれば小き百合掘る

一四六 またひとりとはやしに來て鳩のなきまねしかなしきちさき百合の根を掘る

一九二 いなびかりそらに漲ぎりむらさきのひかりのうちに家は立ちたり

一九三 いなびかりまたむらさきにひらめけばわが白百合は思ひきり咲けり

一九四 空を這ふ赤き稲妻わが百合の花はうごかずまろく怒れり

一九五 いなづまにしば照らされてありけるにふと寄宿舎が恋しくなれり

一九六 夜のひまに花粉が溶けてわが百合は黄色に染みてそのしづく光れり

賢治にとって「百合の花」は恋を象徴し、「百合根を掘る」行為は失恋と宗教

的な情操の希求を象徴しているようだ。純潔や処女性をイメーじさせる白百合の花はキリスト教の概念でも神の花であるが、根に意義を求める点で仏教の花である蓮華にも通ずるものがあるだろう。

また明治四十五年（一九一一年）十五歳の時、妹トシとともに仏教講習会に参加し島地大等の法話に感銘を受けた賢治だが、そのことを思い返しながら後年「文語詩篇ノート」に「島地大等 白百合ノ花海軍少佐」のメモをとっている。伊藤チエに特別な感情を抱きつつも別れたあと制作した、詩「火の島」にも「海鳴り寄せ来る椿の林に／ひねもす百合掘り／今日もはてぬ」という一節がある。『国文学編纂部・編『宮沢賢治の全童話を読む』（学燈社、二〇〇三・五）第七七葉から第八〇葉の部分。草稿発見時には「ボラーノの広場」の原稿とは別にされていた。筑摩書房の『宮澤賢治全集第十一巻校異編』参考。

佐藤隆房『宮沢賢治』（富山房、一九七五・四）
注六に同じ。